

ゼニガタアザラシの保護管理計画作成準備のための専門家ワークショップ 概要

- 1 日時 平成24年4月26日（木）～27日（金）
- 2 場所 北海道地方環境事務所
- 3 参加者 (五十音順)

宇野裕之	(独)北海道総合研究機構 環境科学研究センター (27日のみ)
小林万里	東京農業大学生物産業学部アクアバイオ学科 准教授
小林由美	北海道大学大学院水産科学研究員 学術研究員
坪田敏男	北海道大学大学院獣医学研究科 教授
永沢 亨	(独)水産総合研究センター北海道区水産研究所 さけます資源部長
中岡利泰	ERIMO・SEAL・CLUB 事務局長
羽山伸一	日本獣医生命科学大学獣医学部獣医学科 教授 (座長)
藤井 啓	ひれあし研究会
松田裕之	横浜国立大学環境情報研究院 教授
三谷曜子	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 助教
山村織生	(独)水産総合研究センター北海道区水産研究所 高次生産グループ長
和田一雄	元東京農工大学 教授 (事務局 環境省)

4 開催趣旨

ゼニガタアザラシの保護管理計画作成する準備として、科学的なデータや技術を収集し、課題を整理することを目的として開催したもの。

5 概要

(1) 情報の共有と課題の整理

① 情報の共有

(生物学的情報)

- ・ えりも地域での最大確認数は約 600 頭。調査した日の状況や調査者の調査精度の違いに注意する必要があるが、30 年では増加傾向、ここ 5 年程度では増加率がにぶっている様子。

- ・ えりも地域と道東個体群は、これまでの調査では交流は少ないと考えられ、えりも地域の個体群は定着性が強い。
- ・ 幼獣の死亡率が海外の事例に比べて高い。
- ・ 30年前から20年の間に繁殖可能年齢が高くなっている可能性あり。

(被害関係の情報)

- ・ サケの漁獲量の減少に伴い、被害率が増加。
- ・ 日本近海太平洋側のサケの回帰率は、ここ3年は低い水準。
- ・ えりも地域のサケ以外の他魚種の漁獲量は、大きな変動はない。
- ・ ゼニガタアザラシの増加が全体の資源量に影響している可能性は低いが、陸場付近の資源量に影響を与えている可能性はある。
- ・ 定置網において混獲された個体の胃内容からサケが検出されない場合もあり、定置網に入った全ての個体が被害を与えていない可能性も示唆された。
- ・ アザラシは学習能力が高く、特定の個体に常習性が認められる。
- ・ 音などによる忌避対策は有効な方法が少ないが、スズメ爆音機の効果は認められる。また、近年の海外の事例で、ある周波数の音響装置を水中に設置して不定期に作動させることでアザラシの行動が抑制されている事例がある。いずれも音圧が高く、魚類への影響を考慮する必要がある。
- ・ 定置網の金庫への入り口部分へのスリット設置が有効との事例がある。

② 課題の整理

(パワーポイントにて説明)

(2) 保護管理計画の目標について

- ・ ゼニガタアザラシの個体群の安定的維持は必須。えりも地域で400頭程度であれば、絶滅の確率はきわめて低いと考えられる(暫定的な数値)。安定的な維持のためには順応的な管理が重要。
- ・ 主要な漁業被害はサケ定置網であり、その被害軽減が重要(特に金庫中の被害に着目)

(3) 保護管理方法について

保護管理は、被害防除、個体数調整、生息地管理を総合的に実施することが重要である。

① 被害防除

現時点で決定的な防除手法はないが、海外や他地域の事例を参考にしながら

ら、防除手法の導入を検討する必要がある。導入前の実証試験も重要。

(例)

- ・ 音響装置やスズメ爆音機等
- ・ 漁具の改良（定置網の構造改善（金庫入り口へのスリット設置等）によるアザラシ侵入防止）等

② 個体数調整

個体数調整に併せて、影響把握のための調査は必須。

捕獲は容易ではなく、捕獲時期、捕獲手法など、地元とも十分調整・検証する必要。

<捕獲方法>

手法	課題
銃による捕獲	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経験のある狩猟者がいない。 ・ 上陸場で撃つとなると、繁殖場の攪乱、分散による被害拡大の可能性、観光への影響が懸念される。 ・ 安全上の課題。海に向かって撃つことが前提。
網（刺し網型）による捕獲	<ul style="list-style-type: none"> ・ 溺死は動物福祉の観点から選択できないため、網にかかったら速やかに揚げる必要がある。
わな（小定置網型）による捕獲	<ul style="list-style-type: none"> ・ 設置費、管理費ともに高額（小型で800万円、中古でも500万円程度）。 ・ 容易に移動できないため、捕獲できるかどうかわからない。

<時期>

- ・ 繁殖期（4～6月中旬）の捕獲は避けるべき。
- ・ 捕獲には漁業者の協力は不可欠。コンブ漁は7月10日～10月、秋サケ漁は8月30日～11月であり、漁業者が捕獲に従事できる期間は短いと考えられる（6月後半～7月前半?）。

③ 生息環境管理等

- ・ 餌資源の状態をモニタリングして適切な維持に努める。
- ・ サケの回帰率の安定化、相互扶助等による所得補償制度の検討。

(4) モニタリング手法について

<生物学的モニタリング>

- ① 生息数
 - ② 混獲数
 - ③ 捕獲個体、混獲個体の性比や年齢等
 - ④ 遺伝的多様性（数年に一度）
- （その他）対策による行動変化、食性変化、性成熟年齢、出産率、年齢構成、密度効果、餌資源、感染症・寄生虫、交雑等

＜社会学的モニタリング＞

- ① 被害量、漁獲量、被害率、魚価
 - ② 被害範囲
 - ③ 漁業者の被害意識
- （その他）漁家経営状況、対策コスト等

（5）保護管理計画の策定プロセス

- ・ 環境省、水産庁、北海道、えりも町、漁業者、研究者の連携・協力が重要。
- ・ 公的な検討会以外にも、地域の漁業者と意見交換をする機会を作る必要がある。
- ・ 観光サイドとの意見交換も必要。
- ・ 調査や実証を行うにあたって、関係者の調整や進捗管理を行うコーディネーターが必要。